

【オリアム随筆賞（優秀賞）】

母からの最後のプレゼント

會田 克実・神奈川県横浜市

私が結婚して一年目の秋、突然母が亡くなつた。元々肝臓に持病があつたのだが悪化してしまい急なお別れだつた。母はとても器用な人で私が物心ついた頃から機織り機でマフラーを織つていた。全てカシミヤの糸を使っていて肌触りが格別。無地やチエック、縞模様などデザインは無限大でお店で販売していたこともある。「シャラン、カタン、トントン」絹糸に緯糸を通し、足でペダルを踏んで、手元の糸を織り込んでいく。一本のマフラーが出来上がるにはかなりの体力が必要で、今思うと小さな体のどこにあんな力があつたのかと不思議に思う。機織りも大変だがそれに入るまでの工程は更に過酷で数十キロの上質なオフホワイト色のカシミヤの糸を買付け、人ひとりが簡単に入れるほどの大きな鍋に染料を入れ、何時間も煮ては好きな色に染める。気に入らないと何度も何度も染め直し、その染めあがつた糸を今度は機械を使って一つ一つ手の平サイズの毛糸にしていくのだが想像を絶する程、時間と労力が掛かる。家族が手伝おうとすると素人には触らせたくないようで頑なに断り、母が全ての作業を一人で行つていた。私はそんな職人気質の母がとてもかっこよく思えたし、大好きだつた。

父は既に亡くなつていたし、二人の娘も結婚して家を出ていたので母が一人で暮らしていた実家は処分することになつた。狭い家ながら、遺品整理で残すものと捨てるものに分けていくのは思つた以上に大変だつた。姉は遠方に住んでいて二人の小さな男の子を育児中で頼りには出来なかつたし、私は結婚したばかり。更にフルタイムで働いていた為、土日に旦那と実家に来ては片付けと掃除に追われる日々だつた。生活用品や家電、家具、洋服などは使うか使わないかという基準で容赦なく処分した。困つたのは母が大事にしていた趣味のものだつた。押し入れの奥から、母が丹精こめて作つた糸が十数箱でてきた。若草色や桜色。イチヨウを連想する温かみのある黄色。鮮やかなピンクやオレンジ。どれも他はない世界にひとつの中。母の苦労を知つてはいる私はその糸だけはどうしても雑に処分することが出来なかつた。かといつて私が持つていても宝の持ち腐れ。手放したくないけど狭い自分の自宅には置くスペースなんて全くないし迷いに迷つたが、母と同じような趣味をもつた人たちなら使い道があるかもしれないとネットで「機織り教室」を検索してみた。すると家から一時間程度の場所に一軒の機織り教室を見つけた。電話して事情を説明するとその教室の代表者の先生がすぐに来て下さつた。にこやかな優しい紳士で私の話

を熱心に聞いてくれた。会つたばかりとは思えないほど話がはずみ「教室のみんなと大事に使います」と言つて全ての糸を持って帰つてくれることになった。親不孝ばかりしていた私が唯一できた母への親孝行だったと思う。

「良かったらお母さんの作業場を見させてくれませんか?」と先生に言われ、二階にある母の部屋に案内した。六畳の部屋の中央にある機織り機。母は雨の日も晴れた日もいつもここで楽しそうに織っていた。リズミカルで心地良い音が響いていた部屋は主がいなくなり怖いくらい静かだった。「お母様は本当に機織りが好きだったのですね。道具の手入れが行き届いている」と感心され、「立派な糸を沢山頂いたお礼にこの織機、私が解体しますか?」と申し出て下さった。考えてもいなかつた。確かに家を処分すると解体するしか道はないのだが、素人の私にはどこをどう留めてあって、何から手をつけてよいかすら分からぬ。有難く先生の言葉に甘えてお願ひすることになった。かなり時間が経つたと思う。数時間して先生が一階で待っていた私の所に降りてきた。「あなたはもしかしてご兄弟がいらっしゃるのかな?」思いがけない質問に私は「姉が一人」と答えた。先生は「なるほど」と頷きながら「すごいお母様だね。ご姉妹に素敵なプレゼントを残してくれていますよ」と二枚のカシミヤの黒のマフラーを渡してくれた。先生は解体のみならず、織機の中で出来上がつていた母の作品を外し、糸の処理をして私に差し出して下さった。

姉は寒い冬でもコートをあまり着ないような人で、逆に私はコートの下にダウンジャケットを着るほどの寒がり。そんな私たちに母はいつも「私の作ったマフラーがあれば大丈夫!」と玄関でお手製のマフラーを持たせてくれたのを思い出す。この二枚のマフラーは母の最後の作品。母はどんな気持ちで、このマフラーを作つていたのだろう?入院前で具合が悪かったのか、それとも大好きな機織りをして楽しい時間だったのか?先生が丁寧な解体をしてくれなかつたら私はこの贈り物に気付かずに処分していたかもしれない。この上なく柔らかで温かくてまるで母そのもの。私は母からの最後のプレゼントに涙が止まらなかつた。ありがとう、お母さん!